# 松蔭 校長室だより

2024年 3月 1日 発行

―校長から保護者の皆様へのメッセージです―

松蔭中学校・松蔭高等学校
校長 浅井宣光

**おまえはわたしの愛する娘,私の手をとり命を受けよ,おそれることはない,ただ信じなさい。お前を生かすのはこのわたしだけ**
**タリタクム,少女よ起きて歩め,タリタクム,少女よ自分の足で立て（高校卒業式　聖歌 529 番より）**＊タリタクム＝起きて立ち上がりなさいの意

## 高校卒業式 式辞

早春の香りが漂い始めました。ご来賓の皆様のご臨席のもと、高等学校卒業式を聖公会キリスト教式礼拝により晴れやかに挙行できますことを感謝いたします。

保護者の皆様、ご息女の高等学校卒業を心よりお祝い申し上げます。本日のご息女の晴れの日は、保護者・ご家族の皆様にとられては子育ての一つの区切りであり、その瞬間をご一緒させていただいておりますことは、私ども教職員にとりましてもこの上ない喜びであります。ご多用中にもかかわらずご列席を賜り、有難うございます。

卒業生の皆様、いよいよ卒業の日を迎えられました。おめでとうございます。思い返しますと、皆様をこの学校に迎えた入学式の時には、クリスチャンであろうとなかろうと、神様によっていちばん相応しい場所として松蔭に導かれたのだとお伝えし、在校中も折に触れて話しました。しかし、いつも心の内にあったことは、この学校は、私たち教員は皆様を正しく適切に導き、支援できているのだろうか？　もし仮に、他の学校を選んでいたとしたなら、人として一層に豊かに成長し、力を発揮されていたのではないだろうか、ということでした。

ただ今、お一人おひとりの顔を間近に見ながら卒業証書をお渡ししました。未来に向かおうとする自信と勇気を感じさせ、卒業生としての誇りに満ちた素晴らしい表情を間近に見ました。球根の中に秘められた花、さなぎの中から羽ばたく命のように、内なる力による成長ぶりに少しばかり安心しています。小さなからし種が、芽を出し、根を土に張って成長し、花を咲かせようとする今日です。これからは足元に松蔭の土はありませんし、温かく包み込む松蔭の温室もありません。自らの足で立ち、人生を切り開く決意を持って、「もう松蔭の土も温室も私には要りません。大丈夫です」と約束をして明日を迎えていただきたいと思います。私たち教職員はあらためて「タリタクム」の言葉をエールとし、皆様をお見送りしたいと思います。

さて、制服姿で講堂に集う最後の機会となりました。この学校での私からの最終メッセージをお届けしたいと思います。

２０２２年、皆様が高２に進級された年の春から、成人年齢は２０歳から１８歳に引き下げられました。今月生まれの方が１０名おられますが、月末には全員が法律上の成人です。すでに選挙で一票を投じ、参政権を行使した人もいると思います。ある米国人の文化人類学者が日本の高等学校教育を分析し、次のように述べています。「日本の高等学校は、生徒を『大きな子供』として扱い、できるだけ子どものままに留めようと努力している。」「そのおかげで、自立性や社会的な責任の意識が犠牲になっている。」　私たち教員にとっては耳の痛い言葉です。しばらく前のことですが、廊下から生徒の声が聞こえてきました。会話の文脈は分かりませんでしたが、「私ら、まだ子供やもん」という言葉でした。その学者のコメントが脳裏をよぎりました。私たちは、無意識のうちに皆さんを「子ども」扱いし、対等な「大人」として、リスペクトすべきことを忘れる瞬間があったのだろうと反省しています。

先週、ミカエル教会での卒業感謝礼拝の牧師先生のお説教を覚えていますか。コミュニケーション力が重視される現在、相手に自分の考えを伝える力が大切だと言われることが多いが、卒業生の皆さんにはこれから、特に「聞く力」を大切にし、「聞く人」になってください、というお話でした。高校時代まで、自分の話を、将来の夢を、心の辛さや苦しみを、愚痴や悩みを嫌な顔ひとつせず聞いてもらっていたならば、その立場を脱して、「聞く人」になり、人の話に耳を傾けて、相手に安心を与えることができるような「大人」になってください、という意味に私は解

釈しました。

では「大人」であるとか「大人」になる条件とは、どういうものでしょうか？　　ヒントとしては、子供がどのような存在か、ということを考えることにあると思います。

生まれた瞬間から、子どもの人生は親の１００％丸抱えで始まります。赤ちゃんは、愛情たっぷりに抱っこされ、触れられ、守られ、すべてを与えられながら育ちます。保育園・幼稚園・小学校に上がり、家族にも周囲の大人にも大切にしてもらいながら、真心や親切、思いやりをたっぷり受けながら成長します。やがてマナーやエチケット、社会常識や道徳心、品格も教えられ、与えられ、身に付けながら、十数年でようやく親と同じ背丈になりました。それでも分からないことを大人から教えてもらい、たとえ失敗しても許してもらえました。高等学校へ進学したあとも、大人が最終責任を引き受けてくれていました。皆様一人ひとり、今日この日までこの道筋を歩んで来られました。

私は、「大人」の条件とは、もらう立場から与える側へと、立ち位置を換えることではないかと思っています。「与えられる人」から「与える人」になることです。牧師先生の話で言えば、「聞く人」になり、人に安らぎを与えることだと思います。真心、思いやり、親切、誠意、善意、愛情、笑顔、挨拶、そして許し等々・・・、皆様の心のなかにはすでに、与える材料が山のように揃っています。聖書の一節に次のように記されています。「他の者に惜しみなく水を注ぐ者は，自分もまた惜しみなく水を注がれる」(箴言 11:25)。キリスト教主義学校で学んだ皆様にとってこの言葉は、実に抵抗なく心に染み込んでいくのではありませんか？　「与える」とはどのようなことなのかをいつも心の片隅に留め、自分が出来ることを出来る範囲で「与える人」になること。皆様は今、「大きな子ども」時代から「小さな大人」を跳び越え、「一人前の大人」へと立派に成長されています。「与える」ということがすでに、皆様にとっては容易い「大人」の行為となっているように思います。

今年の元日、能登半島地震が発生しました。３学期の朝の全校礼拝では後輩の松蔭生たちが、被災者に思いを寄せ、どうぞその心が癒されますようにと祈りの時間を持っています。１月１７日には、２９回目の阪神淡路大震災の追悼記念の礼拝をこの講堂で守りました。その日の夜、SNS の X に次のような投稿がありました。「震災の時、神戸のある学校が、亡くなった方の遺体の一時収容に、うちの体育館を使って下さいと申し出た。警察官らが学校に行き体育館に入ると、そこは新築でほとんど使われておらず、かえって恐縮した」という内容でした。

学校の南側にある王子体育館が被災者であふれていたため、周辺の学校に犠牲者の一時安置の要請がありました。松蔭は３学期から使い始めたばかりの新しい体育館を遺体安置所として提供しました。行政側の記録では約４０体が収容されましたが、学校の記録では最大で７０体の亡骸（なきがら）が収容されたとあります。私も、身元確認の電話を受けた職員室と体育館の間を何度か往復して実際にその場面を目にしましたが、それ位の数ではなかったかと記憶しています。松蔭が完成したばかりの新体育館を提供したことについて、地元神戸の近隣では、「キリスト教学校の矜持を見た」「松蔭の信念を感じた」と今なお語り継いでくださる方がおられます。今回投稿された X のリプライには、「それって私の学校」「松蔭やん」などのコメントのほか、学校再開後に当時の校長先生が「この体育館は、亡くなった方々に浄められた場所です」と話してくれたことを覚えている等々と続きました。幾人かの卒業生から、X に松蔭のことが投稿されていましたよと学校にメールが届きました。なかにはヨーロッパ在住の卒業生からの連絡もありましたが、まるで言い合わせたかのように同じ一文が添えられていました。「そのような学校に通えたこと、卒業したことを私は心から誇りに思います。」

皆様は、この学校に学ぶ間、「自他を大切に」という学年目標の掲示を廊下や教室で眼にしてきました。コロナによる制限が長く続きましたが、その中にあっても皆さんの学年が発する空気感は、スクールモットー“Open Heart, Open Mind”そのものでした。これから２０歳になり、３０歳を迎え、４０歳、５０歳と年齢を重ねながらそれぞれの人生を歩まれます。松蔭時代に触れた「自他を大切に」の言葉と“Open Heart, Open Mind”のスクールモットーを心の片隅に抱き、「与える人」として振る舞い、行動する資格と力が皆様には備わっています。その振る舞いに「さすが松蔭だ」「松蔭生の矜持を見た」と周囲の人は感じるであろうことも私は確信しています。

これからのご健康とご活躍を心よりお祈りして、卒業式のメッセージといたします。(3/1 松蔭高等学校卒業式校長式辞)